

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320042

研究課題名（和文） 瀧口修造におけるコラボレーションと集団的想像力

研究課題名（英文） Collaboration and collective imagination in Shuzo Takiguchi

研究代表者

笠井 裕之（KASAI HIROYUKI）

慶應義塾大学・法学部・准教授

研究者番号：10265944

研究成果の概要（和文）：瀧口修造は 1960 年代前半から他の芸術家との共同制作、いわゆる「コラボレーション」を活動の主軸とし、とりわけマルセル・デュシャンとの交流を通じてオブジェと言語をめぐる考察を深めていった。本研究は遺された草稿、メモ、書簡等の資料を読み解くことによって「後期瀧口」の歩みに光をあてる試みである。晩年の瀧口の創造的実践が、戦前のシュルレアリスム運動を「集団的想像力」の角度から捉えなおし、シュルレアリスムの新たな展開を導く試みであることを提示した。

研究成果の概要（英文）：From early 1960's, Shuzo Takiguchi deepened his consideration on objects and language, focusing on "collaboration" with other artists, especially through a relationship with Marcel Duchamp. Our research was oriented on footprints of "late-period Takiguchi", through interpreting documentations such as drafts of articles, memos and letters, etc. It could be said that Takiguchi's co-creative activities in his late years were defined as approaches of another development of surrealism, while he reconsidered prewar surrealism movement from a view of "collective imagination".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
年度			
年度			
総計	8,600,000	2,580,000	11,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：美術論・仏文学・シュルレアリスム

1. 研究開始当初の背景

シュルレアリスムに代表される 20 世紀前衛芸術は、国籍や言語の違いを横断するだけでなく、文学・美術・音楽といった既成のジャンルを越境するとともに、個人的作品制作から集団的創造に向かう傾向を顕著に示す。瀧口修造（1903-1979）が、第二次世界大戦前のシュルレアリスム移入においても、戦後

の日本前衛芸術の展開においても、鍵となる役割を果たした人物であることは広く知られている。その瀧口が晩年にいたって批評家としての啓蒙的な活動を捨てて批評言語を根底から刷新し、みずから造形に熱中すると同時に、マルセル・デュシャンへのオマージュである共作の書物＝オブジェ『マルセル・デュシャン語録』（1968）をはじめ、ジョア

ン・ミロ、アントニ・タピエス等との共作の詩画集の制作など、他の芸術家との共同作業、いわゆる「コラボレーション」に力を注ぐようになったことは、作家としての瀧口個人を研究する上でも、同時代に共有された集団的想像力を把握する上でも注目に値する。このような晩年の瀧口の変化に着目する指摘はすでに行われていたが、資料に基づいて作品の生成過程を実証するような研究は存在しなかった。また、海外においても日本の前衛芸術への関心は高まっているもの、瀧口が果たした決定的な役割はごく一部にしか知られていない。

瀧口修造に関連する主な資料は、(1) 富山県立近代美術館（美術作品）、(2) 多摩美術大学（蔵書）、(3) 慶應義塾大学アート・センター（美術作品と蔵書をのぞく遺品）の3か所に保存されている。このうち慶應義塾大学アート・センターには2001年以来「瀧口修造アーカイヴ」が設置され、研究代表者（笠井）と分担者（田中・朝木）はこの資料の分類・整理にあたり、得られた知見を紀要等に発表してきた。2005年には瀧口のヨーロッパ滞在を主題とする展覧会「瀧口修造 1958：旅する眼差し」を開催（慶應義塾大学）、また2009年には展覧会と同名の書籍を刊行した（慶應義塾大学出版会）。以上の研究において痛感されたことは、作品の形成過程を総合的、有機的に捉えるためには、上記3か所に分かれて保存されている資料間の連結を保証する持続的協力体制の確立が不可欠であるとの認識であり、それは主題に具わる越境性に見合った、分野横断的な研究体制が求められていることを意味していた。こうした体制を整えながら、可能な限り広汎な資料分析によって、戦後の、とくに1960年代以降の瀧口と時代が共有した集団的創造性を浮き彫りにすること、これが本研究の出発点において研究代表者と分担者が認識した課題であった。

2. 研究の目的

本研究は、慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」の初期調査結果を基点とし、それを国内外の他機関が所蔵する資料と関連づけ、1960年代以降に瀧口が実践した広義の「コラボレーション」の進行過程を資料によって実証的に復元することで、個人性とジャンル区分を越えた「後期瀧口」の創造活動を総合的に考究し、あわせて瀧口および同時代の芸術家たちに共有された「集団的想像力」の実相に迫ることを目的とした。

本研究が有する学問的意義はおおよそ以下の通りであると考えられる。

(1) 文学・芸術においては完成した作品をもって研究対象とするのが通例であるが、そこに見落とされるものも多い。とりわけ瀧口

のように「作品」「完成」という概念に根本的な疑義を呈した作家を対象とする場合、芸術でも作品でもない断片がどのように制作にかかわったかに着目する本研究の生成論的アプローチにより、「創造」という過程の本質に光がとどく可能性がある。

(2) 瀧口の戦前のシュルレアリスム運動と戦後の集団的想像力の実践を一貫した視座で捉えることにより、戦争によって断絶したかに見える日本の前衛芸術運動（とくにシュルレアリスム）の歴史と展開にあらたな見解をもたらすことができる。

(3) 瀧口個人にとどまらず他の芸術家との「コラボレーション」の角度から資料を捉え直すことで、ある時代を特徴づける集団的想像力を問い直し、従来の文学史、あるいは美術史の影に隠れた創造の営みの機微に迫ることになる。

(4) 本研究の遂行には、美術館（富山県立近代美術館）、図書館（多摩美術大学図書館）、アーカイヴ（慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」）の所蔵資料を横断的に検証する作業が不可欠である。すなわちMLA (Museum-Library-Archives) の連携可能性を探るモデル・ケースになりうる。

3. 研究の方法

瀧口がかかわった共同制作、あるいは広義の「コラボレーション」の着想、生成、完成あるいは挫折の過程を多面的・有機的に捉えるために、「作品」の完成と未完成を平等に対象とし、断片的な資料群から完成作品へといたる生成過程、あるいは未完に終るプロジェクトの放棄への過程を再構成することにつとめた。具体的な作業形態としては、研究代表者と分担者全員による研究会を定期的で開催し（各年度に約20回、3年間で計60回程度）、資料の収集・調査・分析をおこなった。調査研究の拠点としたのは慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」だが、随時、必要に応じて関係者への聞き取り調査、国内および国外の資料調査を実施した。聞き取り調査の対象は、瀧口と実際に共同作業をおこなったことのある岡崎和郎氏、加納光於氏、瀧口がその精神的支柱であった芸術家集団「実験工房」のメンバー山口勝弘氏、湯浅譲二氏、瀧口とジョアン・ミロの詩画集の制作にかかわった田辺徹氏など。国内の資料調査は、瀧口資料を多く所蔵する上記の富山県立近代美術館と多摩美術大学図書館を中心となった。本研究が開始してまもない時期に各々の担当者が一同に会する機会を設け、両機関と慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」が資料データを横断的に活用できるよう協力体制の構築につとめた。国内ではほかに重要な資料を所蔵する倉敷市立美術館、国立国際美術館、また

個人所蔵家のもとでも調査をおこなった。国外では、米国のフィラデルフィア美術館附属アーカイヴ、フランスのジャック・ドゥーゼ文学図書館、マルセル・デュシャン協会アーカイヴを訪問し、瀧口がアンドレ・ブルトン、マルセル・デュシャンとその妻ティニー・デュシャンらに宛てた書簡、オブジェ等、未知の資料を多数確認した。

4. 研究成果

瀧口修造は国内外の多くの芸術家と「コラボレーション」を実践したが、なかでももっとも重要と見られるのは、晩年の瀧口にとって言語とオブジェをめぐる尽きせぬ考察の源泉となったマルセル・デュシャンとの交流であり、本研究はとりわけ瀧口とデュシャンの関係に重点をおいて進められた。その主要な研究成果は、2年目の2011年度と3年目（最終年度）の2012年度に開催された2つの展覧会において発表された。

(1) 展覧会「瀧口修造とマルセル・デュシャン」（主催・会場：千葉市美術館、会期：2011年11月22日～2012年1月29日）

研究代表者と分担者はこの展覧会の企画準備段階から担当学芸員と協力し、とくに瀧口とデュシャンの書簡資料の調査結果を「瀧口修造＝マルセル・デュシャン書簡資料集」としてまとめ、その一部を会場で展示、全体を展覧会図録に掲載した。

瀧口とデュシャンの文通は瀧口がヨーロッパ滞在から帰国した翌年の1959年11月にはじまり、デュシャンが1968年10月に急逝する直前の8月まで続いた。デュシャンは返信をすませた手紙を破棄するのが習慣だったため、瀧口がデュシャンに宛てた手紙はほとんど残っていない。しかし瀧口の手紙の余白にデュシャンがコメントを書き込んで送り返したものがあり、また瀧口はデュシャンから受けとった手紙はもちろん、自分が書いた手紙の下書きも多く保管していた。それらすべてを慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」および個人所蔵家のもとで調査収集し、瀧口がデュシャンに宛てた14通、デュシャンが瀧口に宛てた10通、計24通の書簡を集め、日本語全訳と註解を加えた。瀧口自身が生前に一部引用して紹介したものもあるが、ほとんどが未公開の新資料であり、瀧口の「コラボレーション」の出発点となった『マルセル・デュシャン語録』の成立過程を知る上で、今後不可欠の文献となるはずである。

(2) 展覧会「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」（主催：慶應義塾大学アート・スペース、慶應義塾大学アート・センター、会場：慶應義塾大学アート・スペース、会期：2012年12月3日～22日）
展覧会のタイトルにある「ローズ・セラヴ

ィ」とは、瀧口が構想した現実とも架空ともつかぬ「オブジェの店」にデュシャンが与えた店名である。1968年の『マルセル・デュシャン語録』の奥付には「製作刊行 東京 **Rose Sélavy**」と記されているが、実はその後この名のもとに送り出された一連の制作物があった。その多くは瀧口の生前には公表されなかったが、そのすべてがデュシャンとの直接間接の機縁から生まれた制作物である。瀧口は「ローズ・セラヴィ」を、デュシャンを経由して現代の文学・芸術における言語とオブジェの問題を考察するための場としていたのである。展覧会では、この瀧口の知られざる実践が、戦前のシュルレアリスム運動を「集団的想像力」の角度から捉えなおし、運動の新たな展開を実現する試みであったことを、「作品」とその草稿、メモ、書簡などの資料によって裏づけ、提示しようとした。瀧口は1973年のデュシャン回顧展に際して米国フィラデルフィアとニューヨークに滞在しているが、従来あまり語られることのなかったこの旅に関する資料を発掘して展示し、デュシャン《遺作》との対面やデュシャン未亡人ティニーとの再会など、旅中の重要な出来事に光をあてたことも、この展覧会の成果といえるだろう。図録には研究代表者および分担者全員がテーマごとに論考を寄せ、各自が研究期間内に遂行した作業の成果を発表する機会とした。さらに今後海外の諸機関・研究者とのより緊密な連携をはかるため、図録に掲載したすべてのテキストを英訳した小冊子を製作し、欧米の関係諸機関・研究者に送付した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計24件）

①笠井裕之、純金の鍵の行方：西脇順三郎と瀧口修造、慶應義塾大学アート・センター Booklet：光源体としての西脇順三郎、第21号、査読無、2013、40-58

②朝木由香、実験工房前夜：日米通信社時代の瀧口修造、「実験工房 戦後芸術を切り拓く」展図録、査読無、2013、230-233

③笠井裕之、瀧口修造と東京ローズ・セラヴィ、「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2012、4-7

④朝吹亮二、マルセル・デュシャン語録の語、「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2012、10-12

⑤田中淳一、「扉に鳥影」とその変奏、「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2012、28-30

⑥朝木由香、Personally Travelling：フィラデルフィアへの旅、「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2012、20-23

⑦笠井裕之、終止符を打たないこと：《検眼圖》と「検眼図傍白」、「東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2012、32-34

⑧田中淳一、瀧口修造とマルコルム・ド・シャザル、瀧口修造研究会会報 橄欖、第2号、査読無、2012、38-50

⑨笠井裕之、「後期瀧口」に近づくために：1958年の旅—リバティ・パスポート—オブジェの店、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2011、34-43

⑩朝木由香、笠井裕之、橋本まゆ、水沼啓和、瀧口修造=マルセル・デュシャン書簡資料集、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2011、273-302

⑪朝木由香、瀧口修造=マルセル・デュシャン関連年譜、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録、査読無、2011、304-315

⑫朝吹亮二、アンドレ・ブルトン、ジョアン・ミロ『星座』について、慶應義塾大学法学研究会 教養論叢、第132号、査読無、2011、1-13

⑬朝木由香、年譜・文献、「岡崎和郎 補遺の庭」展図録、査読無、2010、1-13

〔学会発表〕（計2件）

①笠井裕之、純金の鍵の行方：西脇順三郎と瀧口修造、慶應義塾大学アート・センター 西脇順三郎研究会、2013年3月11日、慶應義塾大学

②笠井裕之、瀧口修造と東京 ローズ・セラヴィをめぐる、「20世紀初頭のフランス文芸思潮におけるモダニズムの形成と展開に関する実証的研究」研究会、2012年12月2日、同志社大学

〔図書〕（計2件）

①笠井裕之、田中淳一、朝吹亮二、朝木由香、東京 ローズ・セラヴィ：瀧口修造とマルセル・デュシャン（展覧会図録、収載論文は〔雑誌論文〕の項を参照）、慶應義塾大学アート・センター、2012、48

②Hiroyuki Kasai, Jun'ichi Tanaka, Ryoji Asabuki, Yuka Asaki, Tokyo Rose Sélavy : Shuzo Takiguchi and Marcel Duchamp, Keio University Art Center, 2012, 20

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠井 裕之 (KASAI HIROYUKI)
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：10265944

(2) 研究分担者

田中 淳一 (TANAKA JUN'ICHI)
慶應義塾大学・経済学部・名誉教授
研究者番号：30051642
朝吹 亮二 (ASABUKI RYOJI)
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：70159383
朝木 由香 (ASAKI YUKA)
神奈川県立近代美術館・企画課・学芸員
研究者番号：50450797

(3) 連携研究者

なし